

氏名 (生年月日)	<sup>キム</sup> 金 <sup>ヨン</sup> 容 <sup>ミ</sup> 美 (1981年2月13日)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博甲第122号
学位授与の日付	2018年3月15日
学位授与の要件	中央大学学位規則第4条第1項
学位論文題目	味覚を表現する形容詞の意味構造と語彙体系
論文審査委員	主査 藤原 浩史 副査 林 明子・安部 清哉

### 内容の要旨及び審査の結果の要旨

#### 1. 本論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

##### 第1章 はじめに

1. 研究目的
2. 先行研究
  - 2.1 生理学における味覚の体系
  - 2.2 「味覚表現の形容詞」の体系
3. 本研究の立場および研究方法
4. 研究対象の範囲と用例収集

##### 第2章 「甘い」の多義構造

1. 本章の目的
2. 先行研究及び問題提起
3. 「甘い」の意味構造
  - 3.1 味覚の形容
  - 3.2 態度の形容
    - 3.2.1 「顔（表情）」との組み合わせ
    - 3.2.2 人に対する態度
    - 3.2.3 物事に対する態度
  - 3.3 モノの動き・ありよう
  - 3.4 様態に対する評価

##### 4. 「甘い」の多義構造

5. 本章のまとめ

##### 第3章 「辛い」の多義構造

1. 本章の目的
2. 先行研究及び問題提起
3. 「辛い」の二つの構文
4. 「辛い」の意味構造
  - 4.1 味覚の形容
  - 4.2 態度の形容
5. 「辛い」の多義構造
6. 「甘い」と「辛い」の対義関係
  - 6.1 「甘い」の意味構造
  - 6.2 「味覚の形容」における「甘い」と「辛い」
  - 6.3 「態度の形容」における「甘い」と「辛い」
  - 6.4 「甘い」と「辛い」の対義関係
7. 本章のまとめ

##### 第4章 「渋い」の多義構造

1. 本章の目的
2. 先行研究及び問題提起
3. 「渋い」の意味構造
  - 3.1 味覚の形容
  - 3.2 態度の形容
    - 3.2.1 「顔（表情）」との組み合わせ
    - 3.2.2 物事との組み合わせ
    - 3.2.3 「食い」との組み合わせ
  - 3.3 モノの動き・ありよう
  - 3.4 様態に対する評価
4. 「渋い」の多義構造
5. 「渋い」と「甘い」の関係
6. 本章のまとめ

#### 第5章 「苦い」の多義構造

1. 本章の目的
2. 先行研究および問題提起
3. 「苦い」の二つの構文
4. 「苦い」の意味構造
  - 4.1 味覚の形容
  - 4.2 態度の形容
    - 4.2.1 「顔（表情）」の組み合わせ
    - 4.2.2 物事に対する態度

5. 「苦い」の多義構造
6. 本章のまとめ

#### 第6章 味覚・嗅覚を表す形容詞「酸っぱい」

1. 本章の目的
2. 先行研究及び問題提起
3. 味覚・嗅覚の形容
4. 本章のまとめ

#### 第7章 「味覚の形容」と「態度の形容」の語彙体系

1. 本章の目的
2. 「味覚の形容」の語彙体系
3. 「態度の形容」の語彙体系
4. 本章のまとめ

#### 第8章 おわりに

1. 本論文のまとめ
2. 今後の課題

#### 参考文献

#### 資料

## 2. 本論文の要旨

第1章は本論文の目的、本研究の立場、研究方法と先行研究を提示する。生理学における「味覚」について概観し、言語レベルにおける味覚を表す形容詞の体系の問題についても指摘する。味覚を表す形容詞、「甘い」、「辛い」、「渋い」、「苦い」は多義語であり、その意味構造を第2章から第5章で解析する。また、第6章「酸っぱい」の場合は多義語ではないことも指摘する。

第2章は「甘い」の意味分析である。「甘い」は、味覚の形容、態度の形容、モノの動き・ありよう、様態に対する評価という四つの用法がある。「味覚の形容」は、糖分の味、美味、相対的に味覚の刺激が弱いことを形容し、反応は主に快である。「態度の形容」は言語主体が想定する厳しさを基準に、その基準に達していないことを形容し、主に不快の反応である。「モノの動き・ありよう」は、ある物の動き（ありよう）に対して言語主体が想定する基準に達していない不十分さ（余裕があるさま）を形容し、反応は主に不快である。「様態に対する評価」は、ある様態に対する言語主体の快い評価

で、場合によっては度を超える同類のものが基準になる。以上の特徴から「甘い」は「基準に達していない」と「快い」という二つの意味項目を基に、形容する対象の性質によって多義化する多義語であることを明らかにした。

第3章は「辛い」の意味分析である。「辛い」には味覚の形容、態度の形容という二つの用法がある。「味覚の形容」では、言語主体が許容する範囲の味覚の刺激を基準にして、塩味、辛味、相対的に味覚の刺激が強いことを形容し、主に不快の反応である。「態度の形容」では言語主体が想定する、あるいは一般的な厳しさを基準に、その基準を超える厳しさを形容し、主に不快の反応を導く。「辛い」は「基準を超える」と「不快」という意味項目を基に、形容する対象の性質によって意味が変わる多義語であることを明らかにし、「基準を超えるか超えないか」という観点で「甘い」と対義関係にあることを指摘した。

第4章は、基本味から除外される「渋い」の意味分析である。「渋い」は、味覚の形容、態度の形容、モノの動き・ありよう、様態に対する評価の用法がある。「味覚の形容」は、食品が円滑に飲み込まれる期待に対して、渋味と嚥下を突っ返す感覚でうまく飲み込めないことを形容し、主に不快の反応を伴う。「態度の形容」は要求・願望の円滑な展開を望むものの、実際はある妨げ要因による期待外れの事態が生じることを形容する。「モノの動き・ありよう」は、言語主体の期待に反して物の動きが円滑でないことを形容する。「様態に対する評価」は、ある物事が一般的な美意識という基準からズレてはいるものの、奥深さなどの要素により快と評価することを形容する。「渋い」は「展開が円滑でない（期待外れ）」と「不快」という意味項目を基にした多義語であることが明らかとなった。味覚レベルにおいて「渋い」と「甘い」は対義関係ではないが、転義し多義化した際には「甘い」と「渋い」が対立あるいは類似の関係にあることも明らかになった。

第5章は、「苦い」の多義構造についての分析である。「苦い」は味覚の形容、態度の形容という用法がある。「味覚の形容」は、肉体的な「つらさ」を伴う苦味という不快な味覚を形容する。「態度の形容」は、言語主体の経験が前提になり、過去のこと、あるいは言語主体の能力・努力を超えた事態が引き起こす心理的な「つらさ」を形容する。「苦い」は「つらさ」を引き起こすと「不快」という意味項目により、形容する対象が食物か物事かによって意味が変わる多義語であった。

第6章は、「酸っぱい」を対象に、従来の研究で修辭的な表現、慣用的な表現を例にして多義語と分類したことの問題を指摘し、「酸っぱい」は多義語でないことを解明した。また、「酸っぱい」には味覚の形容と共に、嗅覚の形容の意味もある。この点が他の形容詞と区別される特徴であり、「酸っぱい」が多義化しない理由でもある。

第7章は、第2章から第6章までの分析を基に、「味覚の形容」の体系化と「態度の形容」の体系化を試みている。両用法の体系には「甘い」が特別な位置を占めている以上の共通点は見られなかった。これは従来五つの形容詞が「味覚」の基本義から多義化したという主張に反する結果である。もし、「味覚」が基本義であるとしたら、多義化した「態度の形容」の体系にも何らかの影響を与えるはずではあるが、結果はそうではなかった。さらに、「味覚の形容」においては「甘い」と「辛い」が強い対義関係にあったものの、五つの形容詞の全用法からみると、「甘い」と「渋い」が他より強い関係にある

ことが確認できた。

味覚を表す形容詞の多義性を分析する際に、従来の研究は認知意味論の観点でメタファー、メトノミー、シネクドキーという動機付けによって多義を説明するのが一般的なやりかたであった。本研究は従来の方法とは違う「意味構造」の分析という方法で多義を説明する。日本語の味覚を表現する形容詞の体系は、人間の生理感覚を基にして一次的に用意されたものではなく、様態を評価する形容詞から二次的に構築され運用するものであることを明らかにした。

### 3. 本論文の評価

#### 3. 1. 研究方法

本論文は、各種の日本語コーパスから、味覚を表す形容詞を採取し、意味分析をおこなうものであった。味覚を表す形容詞はいずれも多義的であるが、実証的に意味記述によって、その多義の種類を確定する。そして、これをもとに、多義を生み出す意味の構造を理論的に考察している。

味覚を表す形容詞の多義性については、現在、認知意味論的手法による比喩的転義として説明されているが、プロトタイプの認定に理論的脆弱性があり、意味の派生関係が実証性に欠ける。これに対し、筆者は、単語の語義を複数の意味項目の構成体と考え、場面と対象との組合せによって多義が生成するモデルを提唱するものである。

#### 3. 2. 論文構成と論理性

第2章においては、「甘い」の多義構造を分析し、味覚形容詞としては、「糖分の味」「相対的に刺激が弱い」「美味」の3つの意味を認定する。従来の研究ではここから、態度や様態への転義が想定されていたが、本論文では多義全体に共通する「基準に達していない」と「快い」という二つの意味項目の構成によって、「快い」ことから「魅力の刺激」様態、「快い」と「基準に達していないこと」から味覚の刺激、「基準に達していないことから」態度、そして、もの・動きの有り様に派生する構造とする。味覚の表現がプロトタイプではなく、基本的な意味項目から生成される用法の一つであることを明らかにした。

第3章では、「辛い」を同様の手法で分析し、「基準をこえる」と「不快」の2つの意味項目から、味覚と態度の用法に派生することを明らかにする。さらに、「甘い」の意味構造と比較し、共通性と相違性を明確にした。「甘い」と「辛い」は、ある基準を超えるか超えないか、それによって対義関係を形成する。従来、味覚の表現からメタファーとメトノミーによる転義とされてきたものを、意味構造からの生成として説明することで、「甘い」と「辛い」の多義の非対称性を説明する。

第4章では、この方法論に基づき「渋い」を分析する。「渋い」の多義性は「不快」と「展開が円滑でない」ことを基本義とし、味覚、態度、物の動き、様態に展開し多義を形成する。「渋い」は基本味ではないが、これも「甘い」と対立関係と類似関係を有することを記述する。

第5章では、「苦い」が「つらさ」を引き起こすと「不快」という意味項目により、形容する対象が食

物か態度かによって意味が変わる多義語である。従来のメタファーとメトノミーによる転義モデルを、意味項目から個別に生成するモデルに更新している。

第6章では「酸っぱい」について考察する。この語は味覚・嗅覚の形容を事とするが、他の語彙と異なり態度の形容などに多義化しない。味覚の感覚が態度の形容に比喩的に転義する、という認知意味論的モデルに適合しない事例であることを確認する。

第7章では、以上の結果をふまえ、「味覚の形容」の体系化と「態度の形容」の体系化を試みる。両者の構造は「甘い」が代表的であることは共通するものの、構造的にまったく異なることを示す。特に、各単語の使用頻度の視点を導入し、もっとも基本度が高い「甘い」を中心としてその他の単語との対立関係が成立していることを示した。この結果、味覚の意味から多義が生ずるのではなく、逆に味覚の表現が、様態を評価する形容詞から二次的に構築されていることを明らかにした。

### 3. 3. 研究の意義と問題点

近年、意味論において、多義現象は、メタファー等による転義として説明する方法が主流である。しかしながら、その方法では、多義のいずれが基本義でいずれが派生義なのか、判然としない。そして、語彙史に照らすと、日本語の歴史的な変遷と一致しないことがしばしばある。金氏の方法論は、単語の意味を複数の意味項目の構成体、すなわち、意味構造としてとらえる。これにより、多義現象を意味項目単位で記述することができ、多義のしくみを理論的に説明できる可能性を有する。

本論文においては、「甘い」「辛い」「渋い」「苦い」の4語の意味構造が、「快／不快」の意味項目と、刺激の性質の意味項目の二つの要素からなる評価の形容詞であることを明らかにした。意味項目（意義素）と単語の意味の関係性について、さらに洗練が必要ではあるが、単語が語彙のネットワークの中で意味を獲得するメカニズムを明らかにしていると評価できる。

ただし、次のような点に改善の余地がある。

- ① 各形容詞の多義の用法分類（4～2）は、帰納的にまとめられたものであるが、なんらかの演繹的基準があるかのように見える。論述の洗練が必要である。
- ② 単語の重要度を、使用頻度によって説明する部分がある。妥当性はあるものの、数を質に転換する理論的な根拠が必要である。
- ③ 多義の生成において、単語の基本的な意味項目と、形容詞の評価対象の意味項目との加算によって意味が形成されることを明示する必要がある。
- ④ 本論は共通語を対象とする共時的研究であるが、意味の派生や語彙体系の形成という現象には、時間的な変化と地域・個人による変異が含まれる。通時的な実証研究と、共時的な理論研究の分離が望ましい。

このような点に洗練が必要であるが、今後、対象の拡大と理論の進展によって改善されることを希望する。

### 3. 4. 全体評価と合否判定

以上、日本語の基礎語彙である味覚を表す形容詞についての意味研究として優良であり、また、多義の生成について新知見を得ており、すぐれた研究であると評価する。よって、博士（文学）について合格と判断する。